

2 山陰地域における縄文～弥生時代の打製石鏃について

(1) はじめに

石鏃は、縄文時代以降の狩猟活動において普遍的な位置を占めた道具であり、島根大学構内遺跡からも、縄文早期末葉～前期とみられる数点の打製石鏃が出土している。ここでは、これらの資料を起点に、山陰地域中央部（ここでは、資料数から便宜的に石見～伯耆西部とする）における縄文～弥生打製石鏃を集成し、若干の基礎的考察を加えておくものとする。

(2) 山陰地域におけるこれまでの検討

丹羽野裕・川原和人氏は、石見沿岸部の日脚遺跡（島根県浜田市）における縄文早期末葉の石鏃を検討し、A類（凹基式で、挟りが深く、脚端及び挟入部は方形または円形を呈する。）・B類（凹基式で、脚端は尖り気味。）・C類（ほぼ二等辺三角形を呈する平基式。）に分類した（丹羽野他1985）。各比率は、A類が52%、B類が43%、C類が5%となっており、凹基式、とりわけ鍬形鏃（後述の凹基式4類）が高い位置を占める点を認識した。石材では、安山岩が72%、黒曜石が27.5%を占める。また、大きさでは、長さ1.1～3.3cmのバラエティーがみられることから、獲物の大きさ等により鏃の使い分けがなされていた可能性を想定している。

竹広文明氏は、中国山地西部の掘田上遺跡（島根県瑞穂町）における縄文早期押型文土器（神宮寺式～黄島式～高山寺式）に伴う石鏃を検討している（竹広1991）。肉眼観察によると、ここでは、広島県冠山地域産の安山岩が主に用いられていると推定されている。また、各層位出土の形態構成比の分析から、神宮寺式→黄島式→高山寺式の変遷過程において、後述の凹基式1・2類・平基式が等量程度ある段階、凹基式3・4類を中心に凹基式1・2類・平基式もある段階、凹基式1・2・3類を中心とする段階を認識している。

こうした個別遺跡ごとの検討に対し、濱隆造氏は、日野川流域における時期が異なる3箇所の遺跡の石鏃を比較検討した（濱1999）。すなわち、長山馬籠遺跡（縄文前期、鳥取県溝口町）、目久美遺跡（縄文前・中期、鳥取県米子市）、古市河原田遺跡（縄文後・晩期、鳥取県米子市）を素材に、時期ごとの形態比率、使用石材比率を整理している。その結果、使用石材比率では長山馬籠遺跡・目久美遺跡では隠岐島産黒曜石が80%前後を占め、金山産サヌカイトが14～18%のみに対し、古市河原田遺跡では隠岐島黒曜石が59%に留まり、金山産サヌカイトが41%まで伸びる傾向が看取されている。形態比率では、長山馬籠遺跡・目久美遺跡では凹基式が90%以上（挟りの深いタイプが75%以上）を占めるのに対し、古市河原田遺跡では凹基式が81%（挟りの深いタイプが5%）に減少する。こうした縄文前・中期から後・晩期にかけての形態変化は、西日本における一般的な変化と矛盾しておらず、使用石材の変化に伴う製作上の都合に起因するものではないとする結論が得られている。

また、隠岐島産黒曜石や金山産サヌカイトを軸とした使用石材についての研究は、竹広文明氏による体系的研究がある（竹広2000）。このうち、石鏃に関する言及としては、神戸川上流域にある板屋Ⅲ遺跡において、縄文前期を中心とする第1黒色土層出土の石鏃が黒曜石14点・安山岩3点であるのに対し、縄文後・晩期を中心とする第1黒色土層旧河道出土の石鏃72点全てが安山岩（金山産サヌカイト一定含む）となっており、石材利用率の変化が看取できるとしている。

上記のように、これまでは、個別遺跡における時期的・数量的に限定された資料について検討されてきたにすぎない。現状でも、包含層出土の資料が多く、所属時期が明確でない等の制約があるため、ここでは縄文早期から弥生中期までという、極めて概括的な長期スパンの上に立って検討を加えたい。すなわち、便宜上、(1)縄文早～前期、(2)縄文中～晩期、(3)弥生前～中期に区分し、各時期内に限定できる資料を抽出し、検討する。

(3) 石材 (表14・図51)

当該地域の剥片石器は、主に隠岐島産黒曜石が使用されているが、(2)でみたように、地域的・時期的に若干の特徴が看取できる。

ここでの集計でも、遺跡ごとの資料数に多寡があるものの、概括的には同様の現象が看取できた。

すなわち、縄文早期末葉～前期においては、出雲沿岸部・西伯耆沿岸部・西伯耆日野川流域の遺跡（隠岐島久見原産地から約120km圏内）で、75～100%の高い比率で隠岐島産黒曜石が潤沢に使用されているのに対し、石見沿岸部の日脚A区（縄文早期末葉のみ、隠岐島久見原産地から約160～200km圏内）では20%程度に留まる。また、山間部では、出雲山間部神戸川流域（隠岐島久見原産地から約120～160km圏内）・石見山間部（隠岐島久見原産地から約160～200km圏内）とも60%前後の使用率を示している。石見山間部では、早期押型文期の黒曜石使用率がわずか2.2%（掘田上遺跡・島根県瑞穂町）にすぎないのに対し、縄文早期末葉～

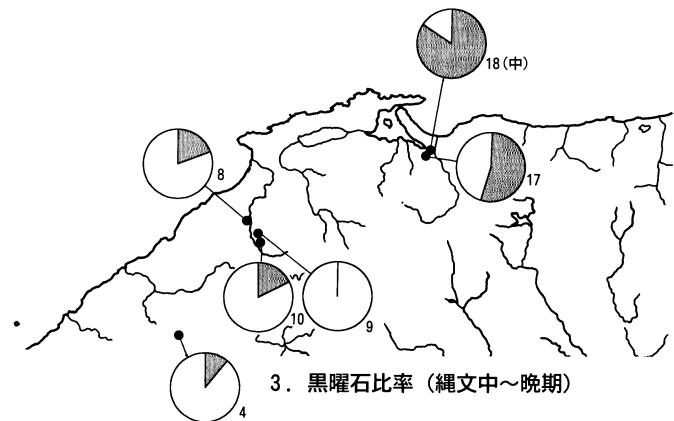
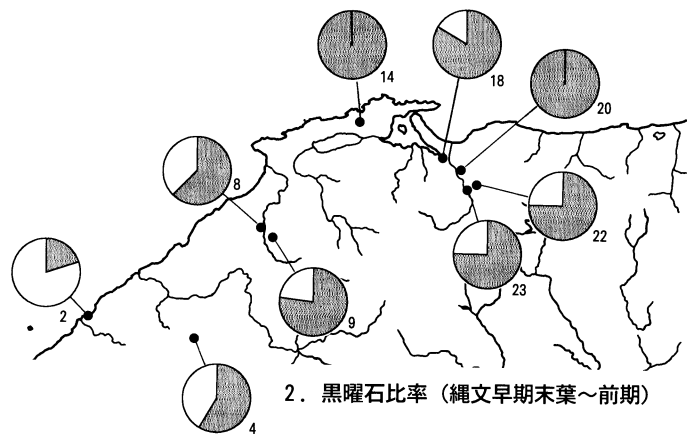
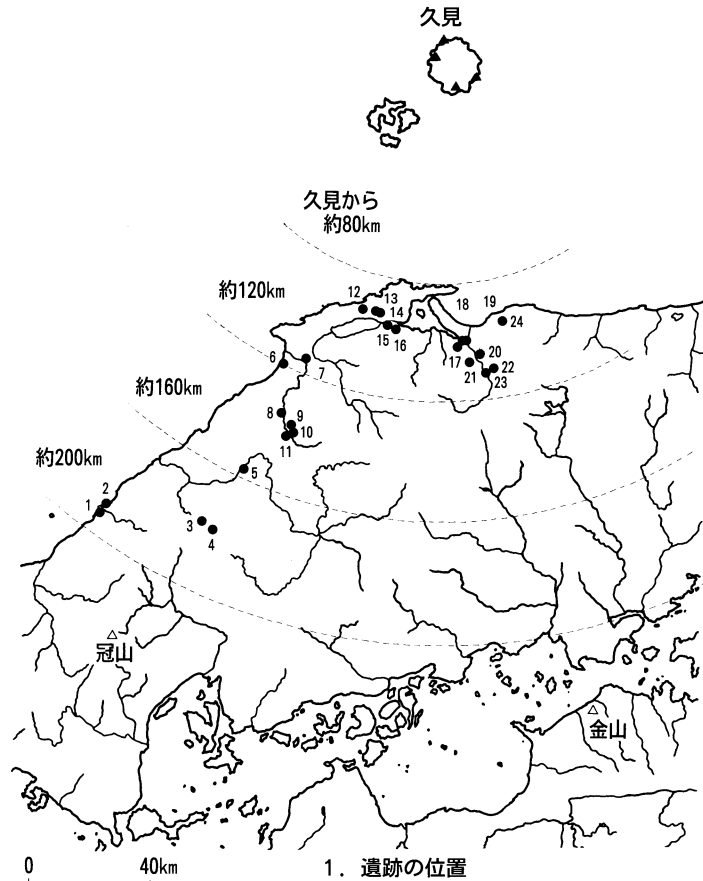


図51 石鏃出土遺跡 (1/2, 560, 000)

表14 遺跡別黒曜石製石鏃使用率

	位置 図51	遺跡名	所在地	地域	時期	黒曜石 製個数	石鏃 全体数	黒曜石 使用率
縄文 早～前期	20	上福万2次	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	縄文早～前期初頭	12	12	100.0%
	18	目久美	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	縄文前期	66	79	83.5%
	23	長山馬籠	鳥取県溝口町	西伯耆山間	縄文早～前期	73	97	75.3%
	22	下山南通	鳥取県溝口町	西伯耆山間	縄文早期後半～前期前半	21	28	75.0%
	14	西川津Ⅲ	島根県松江市	出雲沿岸	縄文早期末葉～前期初頭	8	8	100.0%
	9	板屋Ⅲ	島根県頓原町	出雲山間	縄文前期	10	13	76.9%
	8	下山	島根県頓原町	出雲山間	縄文早～前期	15	24	62.5%
	2	日脚A区	島根県浜田市	石見沿岸	縄文早末葉	9	45	20.0%
	3	堀田上	島根県瑞穂町	石見山間	縄文早期(押型文期)	1	45	2.2%
	4	郷路橋	島根県瑞穂町	石見山間	縄文早期末葉～前期前半	7	12	58.3%
縄文 中～晩期	18	目久美	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	縄文中期	16	19	84.2%
	17	古市河原田	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	縄文後～晩期	13	24	54.2%
	10	神谷原Ⅱ	島根県頓原町	出雲山間	縄文中～晩期	3	17	17.6%
	9	板屋Ⅲ	島根県頓原町	出雲山間	縄文後期後半～晩期	0	61	0.0%
	8	下山	島根県頓原町	出雲山間	縄文中～晩期	8	42	19.0%
	4	郷路橋	島根県瑞穂町	石見山間	縄文後～晩期	1	9	11.1%
弥生 前～中期	14	西川津(海崎)	島根県松江市	出雲沿岸	弥生前～中期	48	64	75.0%
	16	布田	島根県松江市	出雲沿岸	弥生前～中期	32	49	65.3%
	19	長砂第2	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	弥生前～中期初頭	2	8	25.0%
	18	目久美	鳥取県米子市	西伯耆沿岸	弥生前～中期～	104	151	68.9%

*未製品は除外。

前期前半では58.3%（郷路橋遺跡・島根県瑞穂町）に増加しており、早期末葉頃から黒曜石使用率が高まるようである。

縄文中～晩期では、出雲・石見山間部で、安山岩ないしサヌカイトの使用率が高まり、黒曜石使用率は20%を下回る。西伯耆沿岸部でも、前期と比較して黒曜石使用率は減少している。

弥生前～中期では、まとまった資料が出雲・西伯耆沿岸部しかないが、西川津遺跡で75%、布田遺跡で65.3%、目久美遺跡で68.9%を示し、概ね70%前後の使用率といえる。

こうしてみると、隠岐島産黒曜石の消費は、産地からの距離や水運・陸運といった流通手段を反映した離心減少的な様相を示し（穴道・藁科1985）、縄文早期末葉～前期頃では、古穴道湾・古中海湾沿岸や日野川下流域において使用頻度の潤沢な流通圏があり、神戸川流域山間部や石見沿岸部・山間部等では、ある種の中継を介したいわば2次的ないし3次的な流通圏をなしていたといえる。

また、概括的には縄文早期末葉～前期頃に黒曜石消費の高揚期があり、縄文後～晩期頃は低調になることが追認できる。弥生時代にはいると、再びやや使用率が高まる印象を受けるが、今後の資料増加による追認が必要であろう。

(4) 形態

石鏃の形態分類は、基部と茎有無を基準にした分類（佐原1964）をもとにし、さらに凹基無茎式を抉りをもとに細分した竹広分類等（竹広1991）に準拠する。すなわち、

- ・ 平基無茎式
- ・ 凹基無茎式1類…抉りが浅く、弧状に近い形態。
- ・ 凹基無茎式2類…抉りが比較的浅く、低三角形に近い形態。
- ・ 凹基無茎式3類…抉りが深く、正三角形・長三角形に近い形態。

- ・ 凹基無茎式 4 類…抉りが深く、逆 U 字に近い形態。いわゆる鋏形鏃。
- ・ 凸基無茎式

となる。

まず、山陰地域全体でみると、縄文～弥生時代を通して無茎式で占められるとあってよい。また、凸基式は、全時期を通じてほとんどみられず、平基式と凹基式で占められる。弥生時代における瀬戸内・近畿地域で一定の割合を占める凸基式・有茎式（松木1989・寺前2001）は、山陰地域では稀である。

縄文早～前期では、凹基式 2 類が半数以上で、凹基式 3・4 類がそれぞれ一定の割合を占める。凹基式 4 類は、他の時期にほとんどみられず、当該期に特徴的な形態とあってよい。続く、縄文中～晩期では、平基式と凹基式 1 類の割合が高まり、凹基式 3・4 類は減少傾向にある。弥生時代に入ると、前代に続いて凹基式 3・4 類の割合はさらに減少する。

この様に、大局的な変遷からみると、縄文早～前期におけるバラエティーのある抉りから、次第に抉りの浅い形態や平基式に収斂していく現象が追認できよう。

また、濱隆造氏は、米子平野周辺の縄文石鏃に関して、「時期によって使用石材の比率が変化するが、同時期の石鏃は石材を異にしても各形態の比率がほぼ同じであり、指向する形態に石材による使い分けがなかった」として、「時期が下るにつれ抉りを省略する傾向の要因としては、作業の省力化、簡便化、それに伴う素材の有効利用などが想定できる」としている。弥生石鏃においても、調整剥離が全面に及ばず素材面を残したり、調整剥離が粗雑化したりするものが多くなる傾向が認められ、縄文石鏃の上記の指向性の延長上に位置付けることができる。

(5) 重量・法量

重量では、各時期とも 1.0 g 以内に最も濃密な分布があるといえる。さらに、やや希薄になるが、2.0～2.5 g 前後以内までは、ヒアタスなく分布しており、石鏃として一般的な重量を示している。さらに、こうした分布とはヒアタスをもって、3.0 g を越える石鏃が、時期を問わず、わずかながら散見される。

このように、石鏃重量を大きくみると、2.5 g 前後以内におさまる普遍的なまとまりと、それを超えるものとに弁別できる。石鏃を狩猟用具の用途に限定するなら、2.5 g 前後以内の石鏃が捕獲対象物や使用環境に応じて普遍的に使用されたとみられるが、さらに重量のある石鏃をごく少量用いた狩猟形態の存在が予想できる。

長さ・幅からみた法量では、長さ 10.0～30.0 mm・幅 10.0～20.0 mm に濃密な分布があるが、長さ 35.0 mm を超える大型のものも散見される。

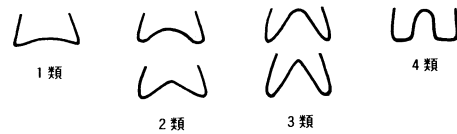


図52 凹基無茎式石鏃の抉り形態分類図
(竹広1991より)

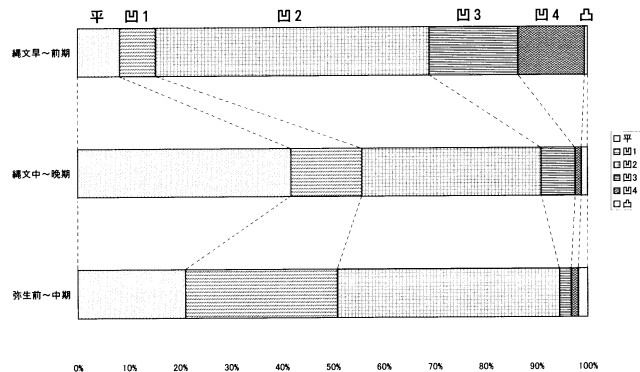


図53 石鏃型式別組成比

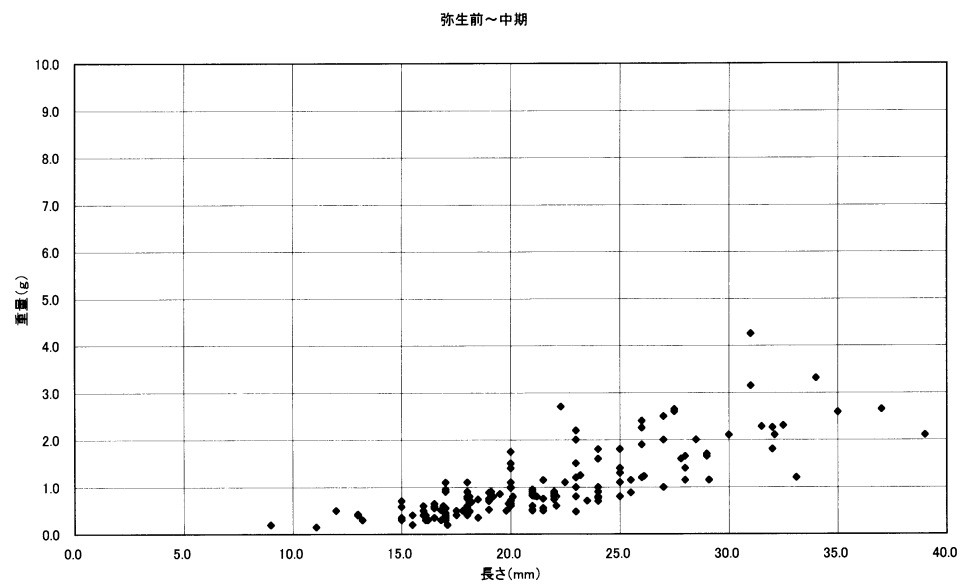
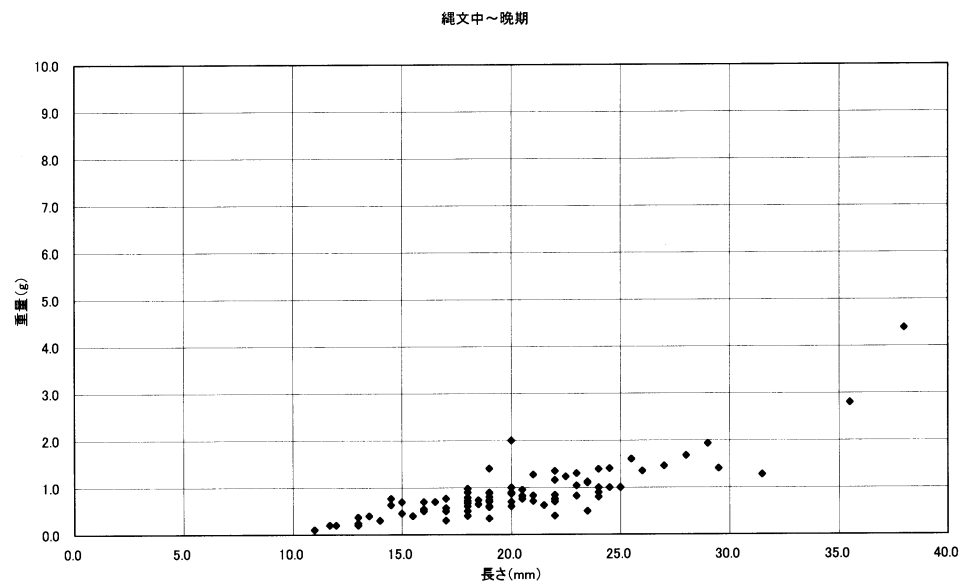
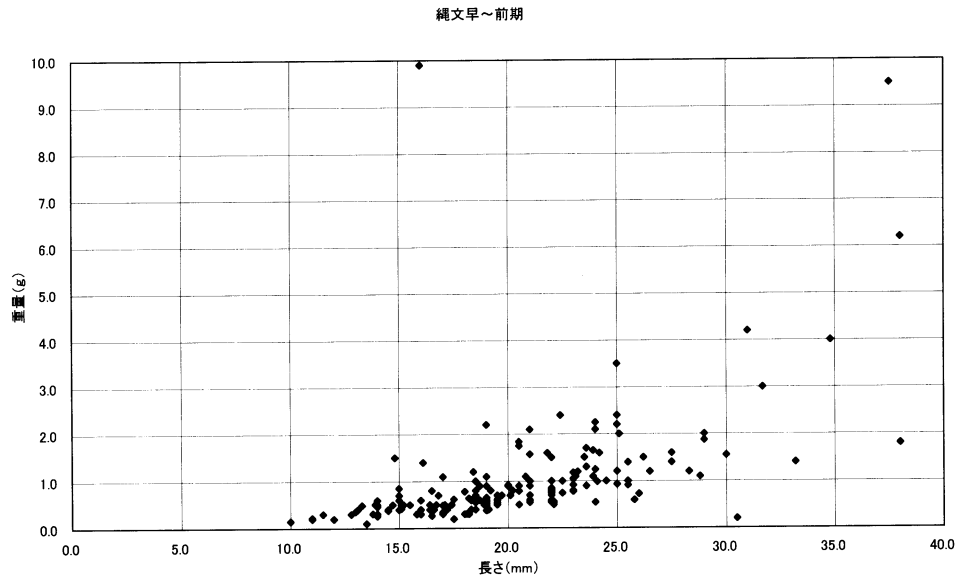


図54 石鏃の長さ／重量分布

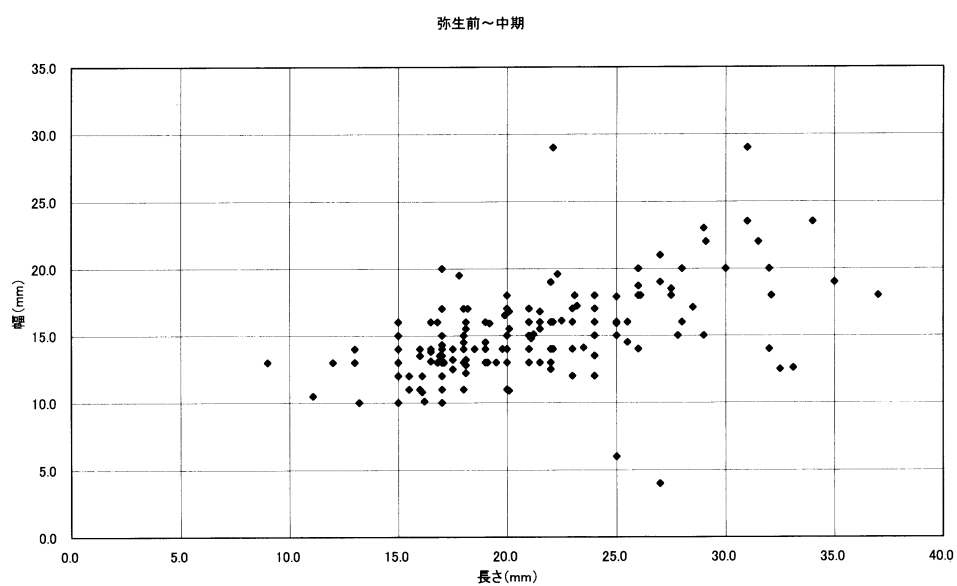
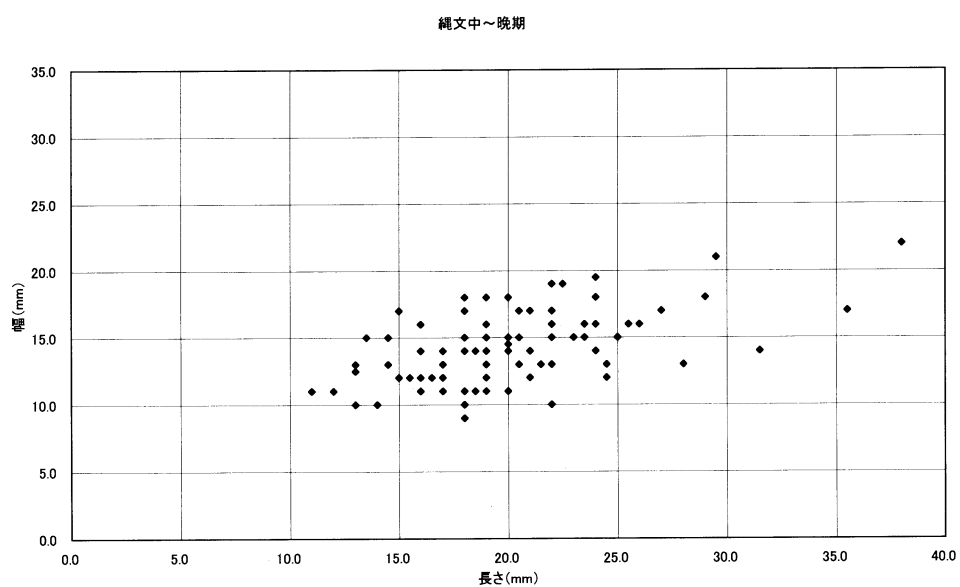
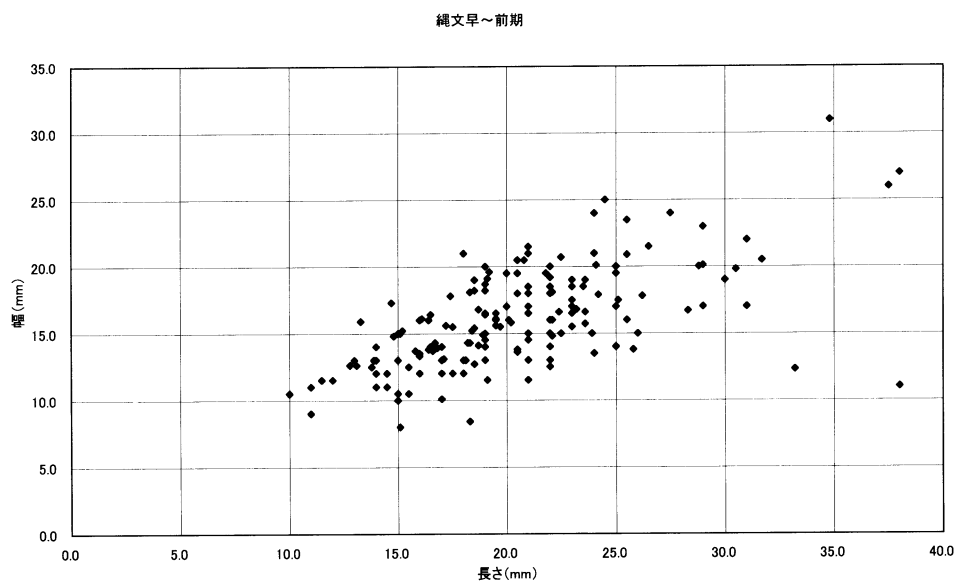


図55 石鏃の長さ／幅分布

(6) まとめ

以上、石鏃の形態・法量・重量・石材について、時期的・地域的に通観し、おおまかな傾向性を確認した。結果的には、竹広文明氏や濱隆造氏をはじめとした先行研究の結果を追認したにすぎない。

石材では、縄文早期末葉～前期に隠岐島産黒曜石の使用率が高く、縄文後～晩期には退潮する可能性が認められることから、隠岐島産黒曜石の供給量・流通量が減少し、補完的にサヌカイト等が使用される背景が想定できる。加えて、縄文早期末葉～前期は、形態にバラエティーがみられ、製作技術が精緻である点が認識された。石鏃形態の変化については、他地域からの様式的影響の結果が想定されるし、石鏃機能とどの程度、直結するかも今後の検討課題となる。地域における内的要因に求めるなら、ここでは、当該期の生業に占める石鏃使用、道具に占める石鏃の重要性を象徴する現象として説明しておきたい。

縄文早期末葉～前期は、宍道湖・中海沿岸部における本格的な遺跡形成・増加の時期であり、さらには「縄文海進」に伴う親水的な生業空間が形成される時期でもある。すなわち、こうした石鏃使用環境の多様化が、上記現象に果たした役割も視野に入れておきたい。

もとより、ここでは既報告資料のみを対象としているため、発掘調査時のサンプリングエラーで欠落した資料等が看過されている点において不十分な検討であることは否めない。また、遺跡ごとの性格差や拠点性等をほとんど無視したが、今後の資料再集成と別視点による再検討が必要となる。加えて、他地域や弥生後期も視野にいれながら、縄文～弥生時代における鏃の流通・消費相にも改めて接近していきたい。

参考文献

- 赤堀英三 1929「石器研究の一方法―石鏃に関する2、3の試み―」『人類学雑誌』44-3
- 石井賢太郎・松本直子 1998「縄文時代から弥生時代にかけての打製石鏃の形態変化」『人類学研究』第10号 人類学研究会
- 宇野隆夫 1996「西洋流通史の考古学的研究―イギリス考古学の研究動向から―」『古代文化』第48巻第10号 (財) 古代学協会
- 神野恵 2000「弥生時代の弓矢(上)・(下)―機能的側面からみた鏃の重量化―」『古代文化』第52巻第10・12号 (財) 古代学協会
- 小林行雄・佐原真 1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会
- 下條信行 1991「西日本―第Ⅰ期の石剣・石鏃」『日韓交渉の考古学 弥生時代編』六興出版
- 穴道正年・藁科鉄男 1985「29 島根県隠岐黒曜石産出地 ―原石産出地と原石分布圏」『探訪縄文の遺跡 西日本編』有菱閣
- 竹広文明他 1991「第3章 掘田上遺跡」『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 竹広文明 1993「縄文時代の石器原材料獲得―金山産サヌカイトをめぐる―」『潮見浩先生退官記念論文集 考古論集』
- 竹広文明 2000「山陰における石器石材利用の二、三の問題」『島根考古学会誌』第17集
- 寺前直人 2001「弥生時代における石鏃大形化の二つの画期」『待兼山論叢』第35号史学篇

- 丹羽野裕・川原和人 1985「Ⅲ. 1.(3)A地区・第3号墳」『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 濱 隆造 1999「米子平野周辺における縄文時代の石器利用について」『古市遺跡群1（古市カハラケ田遺跡・古市河原田遺跡）』鳥取県教育文化財団調査報告59（財）鳥取県教育文化財団
- 平野芳英 1986「隠岐島産の黒曜石－島根県内出土黒曜石の蛍光X線分析から－」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』
- 松木武彦 1989「石製武器の発達と地域性－とくに打製石鏃について－」『考古学研究』第35巻第4号 考古学研究会

遺跡文献

1. 鰐石：榊原博英 1999「島根県鰐石遺跡出土の大陸系磨製石器類について」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』
2. 日脚A区：丹羽野裕 1985『日脚遺跡』島根県教育委員会
3. 堀田上：竹広文明他 1991『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会
4. 郷路橋：足立克己他 1991『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』島根県教育委員会
5. 沖丈：牧田公平 2001『沖丈遺跡』主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 邑智町教育委員会
6. 上長浜貝塚：川上稔他 1996『上長浜貝塚』出雲市教育委員会
7. 三田谷Ⅰ：今岡一三他 1999『三田谷Ⅰ遺跡』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 島根県教育委員会
8. 下山：深田浩 2002『下山遺跡(2)』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会
9. 板屋Ⅲ：角田徳幸他 1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会
10. 神原Ⅰ・Ⅱ：鳥谷芳雄他 2000『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8 島根県教育委員会
11. 五明田：田中迪亮 1991『五明田遺跡』頓原町教育委員会
12. 佐田講武貝塚：竹広文明他 1994『佐田講武貝塚発掘調査報告書2』鹿島町教育委員会
13. 島大構内1次：会下和宏他 1997『島根大学構内遺跡第1次調査（橋縄手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター
14. 西川津（海崎）：内田律雄他 1987『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区1）』島根県教育委員会／内田律雄他1988『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』島根県教育委員会
15. 石台：広江耕史 1989『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（石台遺跡）』島根県教育委員会
16. 布田：足立克己他 1983『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会／八幡賢一 1991『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』島根県教育

委員会

- 17 a. 古市河原田：濱田竜彦他 1999『古市遺跡群 1』鳥取県教育文化財団調査報告書59 鳥取県教育文化財団
- 17 b. 古市流田：濱田竜彦他 2000『古市遺跡群 2 一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』鳥取県教育委員会文化財団調査報告書62 (助)鳥取県教育文化財団
18. 目久美：小原貴樹 1986『目久美遺跡』加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 米子市教育委員会
19. 長砂第1：小原貴樹他 1990『長砂第1・2遺跡 加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』米子市教育委員会
20. 上福万2次：鳥取県教育文化財団 1986『上福万遺跡Ⅱ』鳥取県教育文化財団調査報告書22
21. 越敷山：中原斉編 1992『越敷山遺跡群』会見町教育委員会
22. 下山南通：太田正康 1986『下山南通遺跡』中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取県教育文化財団
23. 長山馬籠：溝口町教育委員会 1989『長山馬籠遺跡』溝口町埋蔵文化財調査報告書第5集
24. 茶畑山道：辻信広 1999『茶畑山道遺跡』県営庄内地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 名和町文化財調査報告書第24集 名和町教育委員会